
人というもの

月影 沙耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人というもの

【Nコード】
N6548N

【作者名】
月影 沙耶

【あらすじ】
今一度選択のチャンスをやってもいい。そう問いかける男がいた。

私はもうすぐ死ぬだろう。あつけない死に方だったと思う。
綾瀬 椎名は絶望するわけでもなくただ受け入れようとた。
しかし、その思いは現れた男のもと覆る。

私はそこでであった男にすべてを否定された。
彼らの思い。私の思いが交錯しひとつの物語が紡がれる。

第一話（前書き）

まだ、一つ目の作品がろくに進んでいないのにもうひとつ投稿してみちゃいましたw

2作とも更新は遅いのですがスローペースながらがんばってみたいので見捨てないで

くださいw

ちなみに1作品目なのですが改稿しようかなとおもいますw色々話をあわせるためなのですが勢いで書いてしまった部分が大きくどんどんずれていってしまったので・・・。

駄文ですが、皆さんの暇つぶし程度に呼んでいただければと思います。

第一話

私こと、綾瀬 椎名は人生最大のピンチを迎えていた。

もともと、不幸体質だった為これまでも何度となく死にそうになったことは

あるのですが・・・、私の運も完全に尽きたようです。

思えば、つい先程のことです。学校の帰りに公園から飛び出そうとしていた

子供達がいきました。

子供は無邪気でいいなーなんて思ったら、在り来たりな展開に遭遇したんです。

目の前から突っ込んでくるトラックの姿。

「あれは死ぬなー」なんて思ったのもすぐさま体が彼らを助けようと反応していた。

「私が不幸になるのはまだいい。でもまだ私の半分も生きてない子達が死ぬのはやだ！」

そして今に至るというわけです

私の物と思われる物体は直視するのにも堪えられない程痛々しい姿になっていました。地味にトラックで轢かれるとあんなに飛ぶんだと思います。

流石の私も彼処までいったら無理だと思います。

自分のことなのに冷静過ぎる自分に突っ込みを入れたような気がしたが・・・。

少し自嘲気味に笑う。

はぁー。まだ高校入って1ヶ月ですよ。やっとなれたと思ったのに、神様は私の

ことが嫌いなのでしょうか……。

まあ、さっきの子達は助かったみたいだしいいかあ。でもちよつとあの子達には

トラウマになっちゃうかもしれないな。

願わくば、彼らが早く私のことを忘れて自分達の幸せを見つけてくれる事を……。

「ふんっ！何が願わくばだ……。貴様の人生はそこで終わったのだぞ」

振り向くと同じくらい歳の青年が立っていた。

なぜか他人なのに、ものすごい言われようだ。「他人が気にすることでも無いと思う

けど？」彼はその言葉を聞きさらに機嫌を悪くする。

「餓鬼などほおって置けばよかったのだ。何故、貴様が死ぬ必要がある？何故、自分を

大切にしない。貴様は何の為に生きているのだ？」

私の中で何かが切れた気がする。私だって色々とこれまでにあったのだ。何故知らない人

にここまでいわれなければならない？私だってもっと生きてみたいよ！

もつと幸せな人生だったとか何度も思ったよ。何でここまで言われなければならないの！

これまでであった事を色々と思い出し、そして私は思いのたけを八つ当たり気味に、彼に

口走る。自分がいつの間にか泣いていた事に気づかないほどに……。

「全部、神様が悪いんだ！何で私ばかりがこんなに不幸な目にあうの？私ね、不幸体質

だからって気味悪がって誰も近づいてくれないんだよ。親からも気味悪がられて、

半強制的に一人暮らしをさせられたのよ。妹はあんなに・・・可愛くて、周りから

好かれてるのに・・・。」

ずっと我慢していた胸のうちをついぶちまけた・・・。

「言いたい事はそれだけか？貴様はすべてを神という在りもしない物にすぎり、そして

何もしてくれなければそいつのせいにするのか？答えてみるよ！今までお前が何をし

てきたのだ。努力してきたのか？ただ自分は不幸だからとあきらめていたのではないのか？だから飛び出したのではないのか？理由なんて後からの付け加え。丁度、いい

言い訳ができたからではないのか？さあっ否定してみろよ！」

私はその言葉に何も言えなくなってしまう。自分がこんなに弱い存在だった事に改めて嫌気が差す。今までは、自分という存在を否定し傍観者のような感じている事で自分を
見ないようにしていた。ずっと仮面をかぶっていた。さびしい時も、悲しい時も、どう
しても自分には手が届かないものは見ないようにしていた。望まな
いように・・・。

それでもやはり私は、願ってしまう。生きたいと思う私・・・。幸せを願う私。でも、

もう戻らない……。もう私は死ぬのだから……。

「これがなんだか分かるか？」そういつて彼は俯いている私に見るといつてくる。

その手に持つのは漆黒の大鎌……。まるで、死神が持つ鎌そのものであつた。

「これを貴様に振り下ろせば貴様の命は終わる。分かるか？貴様の命はまだ終わつて

ないんだよ。そして、今一度選択のチャンスをやつてもいい。」

「えっ？それつて……。どういう意味？」私は顔を上げ彼に問う。

「貴様に選択のチャンスを与えてやつてもいいといつているのだよ。貴様はこのまま

死ぬ事をえらぶか。そして……。生きる事を選ぶのかを……。ただし条件はあるがなと付け加えて……。

「貴方は何者なの。条件……。つていつたい何なの？」

「見てて分からないか？お前がさつき罵つていた神という存在の一人だよ。まあ見ての

通り、死神だがな。そして条件とはお前がこの鎌を持ち、死神となる事だよ……。」

第二話（前書き）

連日、続けて何とか投稿できました。

思いつく間はそれなりに投稿しようと思っているので
宜しくお願いします。

第二話

こいつは言った。私に生きるか死ぬかを選択しろと。
生きる事を選ぶ代わりに、この大鎌を持てと。
そして・・・死神になれと。

「私の名は、アズラーイール。この漆黒の鎌の銘も”アズラーイール”。かつて主神より作り

出された神の一人で、死と再生を司る者だ」

「アズラーイール・・・？言うに事欠いて神とか名乗りやがりましてか・・・」

ふざけるなその神に何度悪態をはいた事か。自分の運命をのろい、うらみ・・・。そして神など

いるわけが無いと否定し、時には神を恨んだ。

「わたしに、その鎌を持たして魂でも刈り取れって言ってるの？」

「別に嫌ならそのまま息絶えればいい。言っただろう？生きるか、死ぬか決めよと」

何故こいつはこんな問いをしたのだろうか。訳が分からない。何故、今にも死にそうな私に声を

かけ、生きるか、死ぬか決めろと言うのか。

「私を生かす理由でもあるの？貴方にメリットがあることなの？」

「さてな。気まぐれかもしれないし、何か理由があるかもしれない。しかし重要なのは、お前が

生きたいのか、そのまま死にたいかだ。

それと、ひとつ間違えを正してやろう。人の命の長さなどはじめから決まっているものではない。

運命という言葉があるが所詮それは、後からとって付け加えられるもの。神でも先の事は読めない」

私は考える。またこの不幸な人生を送りながら生きるのか？もう少し自分を変えてみる事ができるのだろうか？確かに、あいつの言う通り諦めていた部分はある。今からでも私は間に合うのだろうか。あいつはさっき言っていただろう。先は読めないと。ならこれから変えていくことは可能なのではないか。考える。考える。私は生きて何がしたいのかを。

いえ……。答えなんてはじめてから決まっていたんだ。私は幸せをつかみたい。でも幸せってなに？

どうしたら私は幸せになれるのだろうか。親から好かれること？みんなと友達になれること？

この不幸体質が直ったら幸せになれる……。？

不幸で本当は何なのだろうか？んーんん。なら私は、私なりの幸せを見つける。

「分かった……。私は、私の幸せを見つけない。その為に、生きたい。私に死神とやらの仕事を

教えてくれないかしら」

「よしっ！貴様を今ここに、死神と認定し輪廻転生の輪から外す。

貴様が出した答えを自分なり

に出して見せる」

そして、やつは私にその大鎌を向け……。そのまま振りかざした。私は怖くて、気絶しそうなのを我慢していたが、それでも腰が抜け

てしまったようだ。

「急に何をするのよ！・・・」その後も、いろいろ言っただろうと思ったが、それ以上しゃべれなかった。

痛い！痛い！！イタイイタイイタイイタイ・・・。

頭がずきずきして、私は立ち上がれなくなった。そして、私の胸の中にはさまざまな人の感情がわきあがる。

最初は、幸せな事、楽しい事、嬉しい事。そして、悲しい事、恨み、殺意、後悔、それらが一気に私の中を駆け抜け、私の脳が悲鳴を上げる。

そこから、先は地獄だった何人もの生をみとどけ、死を見届ける。頭が壊れ、狂いそうになる。

そして、私の意識はいつの間にか途切れていた・・・。

「よー。お目覚めかい？どうだ気分は？」

私は、こいつに殺意を覚えてしまった。ここまで死神になる事がきつい事になるとは私は微塵も思っていなかったし、正直まじで死ぬよりきつい苦痛を味わった気がする。これで殺意を覚えないほうがおかしい。

「事前に。どういう風にするか話してくれたって言いでしょ・・・。それで、いったいどの位だったの？私は死神になったの？生き返れたの？」

そして、あいつは私にむかつく笑みを向けて、一言・・・。

「まだだ「はあー？あんたが、じゃあやった事って何なの？あんな

苦痛、二度とするのはごめんよ」「
もう死ぬほどの痛みは、味わいたくないこれは本当の気持ち。

「もうダウンか？それとあれから1週間たったかな？まず先に、死神としての力と、私の記憶を受け継いでもらった。といつても、いまはまだ半分以上を眠らせたままだしな。

先に力を与える事により、死神としての力を定着させなくてはいけない。まーたぶんあそこまで痛いのは当分は無いんじゃないか？」
といつて、笑うあいつ。正直言つて、今、ナイフがあつたら何度も刺したいほどむかついています・・・。

「それにしても、生き返つてないつてどういう事？生き返してくれるんじゃないの？」

その為に、死神の件を受けたのに。どういう事といつて、私はあいつを睨む。

「別にやる事はやったよ。今お前は、病院に運び込まれて、意識不明の状態にある。しかし、まだ死神として力が定着してない間に体に戻ると、力が暴走する可能性がある。

それにお前、力の使い方も知らないでどう仕事するきなんだ？

「うつ。それは・・・。」
「まずは、力の使い方を覚えてもらう。まあーざつと半年くらいだな・・・。」
「へっ。半年・・・？それつて、学校は？」

「ねえー。聞いてもいいかしら？」「なんだ？」
その間、学校はどうすればいいのかしら？「馬鹿か、お前は意識不明のやつが学校なんて通えるわけ無いだろう」

私、やっぱり死んでいいですか・・・。

留年決定ですか。私は一年したと一緒に肩身の狭い学生生活を送る

んですか・・・。

私は心の中で、どうにもなれど、内心思ってしまった。そして、人間諦めも肝心なのではないのかなと思ってしまった。

第二話（後書き）

ちなみに、アズラールとは、本来はイスラム教で死を司る、天使の名前です。

片手には全ての生者の名を記した書物を持ち、人が死ねばそこから名前が消える。姿形は非常に恐ろしく、全身に無数の目、口、舌を持ち、人の罪を見、語り、裁くのだと伝えられる。

ウィキペディア参照

私の中でこれが一番、死神のイメージに近いかなと思って採用してみました。

未熟な文章しかかけない私ですが、意見や誤字、脱字、感想などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6548n/>

人というもの

2010年10月17日02時45分発行